

---

**君に出会えてよかった。**

さら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君に出会えてよかった。

### 【Nコード】

N8032N

### 【作者名】

くら

### 【あらすじ】

野球部のエースピッチャーだった彼と結婚して、娘と三人、幸せに暮らしている私。そんな私が十年ぶりに偶然出会ったのは、昔大好きだったあいつ。彼は夫の元チームメイトで、現在子持ちのバツイチ男……私、「彼に会えてよかった」の？

## 1回

白いボールが、青空へ吸い込まれるように高く上がる。マウンドに立つ圭一郎が振り返り、目を細めて空を仰ぐ。

ボールは大きく弧を描き、フェンスぎりぎりまでグラブの中に納まった。泥だらけのユニフォームで嬉しそうに左手を上げて、豪太が白い歯を見せて笑っている。

「圭一郎のバツクは、名センターの俺にまかせとけ。どんなボールでも捕ってやるから」

試合の後に冗談交じりでそう言った豪太の声が、今、耳の奥に蘇る。

「よう、マネージャー。元気だった？」

放課後、ボールを追いかけて走り回っていた頃と同じように、豪太がおどけた口調で私を呼ぶ。

高校の同級生だった豪太に会ったのは、卒業式の日以来十年ぶりだ。

「え、豪太？あんた何やってんの？こんなところで……」

「何やってるって……決まってるだろ？お前と同じ」

そう言っつて、豪太は私の前で、わざとらしくネクタイを締めなおす。

豪太のスーツ姿を見たのなんて初めてだ。私の中の豪太は、ちょっとだぼついた高校の制服か、野球部の汚いユニフォームしか着ていないから……

「愛する我が子の入学式、だろ？」

豪太が言っつて、昔みたいにしたずらっぽく笑った時、体育館の中で放送が流れた。

「まもなく新一年生の入場です。御父母の皆様はお席に……」

「それじゃあ、またな。アキちゃん」

「あ、ちよつと待つてよ、豪太……」

あわてて追いかけてようとしてつまずいた。履きなれないヒールの靴なんて履いているからだ。そんな私を見て豪太はふつと笑うと、背中を向けて体育館の中へ消えていった。

「ごめんごめん！あつたよ、バッテリー、車の中に……」

息を切らした声を聞き、我に返って振り返る。ビデオとカメラをぶら下げた圭一郎が、慌てた様子で駆け寄ってくる。

「まだ入場してない？利奈は」

「圭ちゃん……豪太に、会つたよ……」

体育館を覗き込んでいた圭一郎が、ゆっくりと振り返る。見慣れたはずの彼の顔を見つめながら、私の胸がなぜか高鳴る。

「豪太……？あいつに？」

校門から続く桜並木。ピンク色の花びらが雪のように舞い落ちて、制服を着ていた頃の私たちの姿が頭をよぎる。

体育館から拍手が巻き起こった。新一年生たちが入場してきたのだ。私と圭一郎はハツと顔を見合わせて、急いで体育館の中へ駆け込んだ。

「いやあ、まさか本当に圭一郎たちだったとはなあ」

ピンクのスーツを着た私とネクタイをした圭一郎と豪太、それにピカピカの一年生が二人。この五人が入学式の後にファミレスで食事をするなんて、それこそ「まさか」だ。

「一年一組の名簿に籠坂つて書いてあつたから、もしやっと思ったら、本当にアキちゃんがいるからさあ」

大盛りライスを頬張りながら、豪太は大きな声で笑う。圭一郎があきれたような、ため息交じりの声でつぶやいた。

「変わつてないなあ……お前」

「そつちだつて変わつてないよ、お前も、アキも」

豪太がそう言つて私を見るから、私はさりげなく子供たちに視線を移した。

「千夏くんって言うのね？利奈と同じクラスだからよろしくね」

豪太の隣で行儀よくハンバーグを食べている千夏が、顔を上げて利奈を見る。利奈は少し頬を赤くしたまま、さっきから一言もしゃべろうとしない。そんな利奈のことを圭一郎も気にしているのか、娘の頭をぽんぽんと叩きながら千夏に言った。

「利奈は人見知りだから……千夏くん、友達になつてくれよな？」

「うん……いいよ」

「女の子大歓迎だよなあ？千夏」

そう言っておかしそうに笑う豪太のことを、千夏はちらりと見てからうつむいた。黙ってまたハンバーグを食べ始める千夏は、利奈と同じように照れ屋さんなのかもしれない。

「千夏くん、今日お母さんは？」

つい口を出した私の言葉に、千夏は顔を上げずに答えた。

「お母さんはいないんだ。お父さんと離婚して、出て行っちゃったから」

思わず圭一郎の顔を見た。圭一郎も私の顔を見る。豪太が照れくさそうにはははっと笑って、利奈がポツリとつぶやいた。

「リコンってなあに？パパ」

利奈が不思議そうな顔で圭一郎に尋ねる。圭一郎は困ったように苦笑いをするだけだ。

「そういうわけだから。ま、よろしく」

豪太が千夏の背中をぽんつと叩いて、そして私に笑いかけた。

## 1回（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます。

このお話は全9回完結予定です。

お暇なときにでも、のぞいてくだされば幸いです。  
よろしく願いいたします。

## 2回

風呂上りの圭一郎が、ビールを探して冷蔵庫の中をあさっている。高校を卒業して野球をやめた圭一郎は、もうキャッチボールさえやっていない。あの頃の引き締まった体は、いつの間にか面影さえ感じられなくなってしまった。

「でもさ、エースとマネージャーがくつついちゃうなんて、なんだかマンガみたいにできすぎてるよね」

昔の、ピッチャーをやっていた頃の彼の姿を思い浮かべながら言ったら、圭一郎は少しふてくされた顔でビールを開けた。

「アキは……好きだったんだもんな」

「え？」

「好きだったんだろ？本当は豪太のことが」

ソファアにどかっと座って、圭一郎はリモコンでテレビをつけた。あきらかに機嫌が悪そうだ。

「何言ってるの？誰がそんなこと……」

「この間の同窓会で、野球部の奴らに聞いたんだ。お前が昔、豪太に告白したとかしないとか……」

「それは……圭ちゃんと付き合う前の話よ。それに私、豪太にふられたのよ？」

エプロンをはずしながらそう言った。本当のことを言っているだけなのに、指がかすかに震えている。

「豪太からそんな話聞いたことないぞ。俺はあいつに何でも話したのに。俺がお前を好きだったことも、あいつは最初から知ってたのに……」

「もうやめようよ。そんな昔の話」

圭一郎に背中を向けてつぶやいた。もどかしいような切ないような、なんとも言えない感情がこみ上げて、なんだか涙が出そうだった。

「知ってたから……あいつはお前と付き合わなかったのかもな……」  
圭一郎はポツリとそうつぶやくと、立ち上がって利奈の眠る寝室へ消えていった。

つけっぱなしのテレビと、飲みかけのビールの缶。私はただぼんやりと、それを見つめながら思う。

豪太になんか会っくんじゃなかった。圭一郎が、私が、こんな思いをするのなら、豪太にはもう二度と会いたくない。

だけど……私と豪太は、やがてすぐに顔を合わせることになるのだった。

娘の初めての授業参観は、もう二十分も過ぎていた。服を選んでいるうちに遅刻してしまった上に、授業が体育だったことを忘れていて、一度教室に行ってしまった。

そして息を切らしながら校庭に飛び出してきた私に手を振ったのは、あの豪太だった。

「何やってんだよ？もう利奈ちゃん走っちゃったぞ？」

仕事の合間にやってきたのか、豪太はスーツ姿だ。子供たちを見守る親の中で、父親は豪太だけだった。

「間違えて教室に行っちゃって……」

「あいかわらずだなあ……ウチのマネージャーは」

豪太がそう言って大きな声で笑ったので、母親たちの視線がこちらを向いた。私は恥ずかしくなって思わずうつむく。

「あ、次、千夏だ。あいつかけっこ、おっせーの」

だけど豪太はそんな視線なんて関係なく、いつものペースを変えることはない。やがてゆっくりと顔を上げた私の前を、かわいらしい一年生たちが駆け抜けた。

「どうして俺に似なかつたんだろ？」

「豪太、走るの速かつたもんね……」

そう言っと思わず浮かんでしまった懐かしい思い出を、私はあわててかき消した。



圭一郎はきつと、こんな私が嫌なんだ。豪太に会うと、やっぱりどうしても、あの頃の自分に戻ってしまいそうになる。私はもう、圭一郎と結婚して、利奈という愛しい娘までいるというのに……  
「ほら、ぶりっけつだろ？あいつ本当に運動神経鈍いんだから」  
そう言つと豪太は、足元に置いてあつたビジネスバッグをぶら下げて歩き出した。

「豪太、帰っちゃうの」

「仕事なんだ、もう戻らないと」

腕時計を覗き込みながら、背中を向けたままの豪太が言う。子供に声援を送る母親たちの向こうに、そんな父親の背中を見つめている千夏が見えた。

「かわいそうだよ……千夏くんが」

私の声に豪太が振り向く。

「それはそうだけど……でも俺も仕事が……」

「じゃあなんで離婚なんてしたのよ？子供のことを思ったらどうしてそんなこと……」

そこまで言つて口を閉じた。周りの母親が遠巻きに私たちを見ている。そしてそんな視線以上に、人の家庭に無責任に口を突っ込んでしまった自分が、恥ずかしくてたまらなかつた。

「そうだよな……」

豪太の言葉に私は顔を上げる。

「俺が悪いんだ……俺のせいで千夏に、かわいそうな思いさせちまつてる」

私は黙つて豪太を見た。その声はなんだかとても切なかつたけど、そんな私の思いをかき消すように、豪太が大声で言った。

「千夏ー！父ちゃんは帰るけど、お前は最後までがんばれよー！」

集まつて座つていた子供たちが、豪太と千夏を交互に見る。

「家に帰ったら、かけっこの特訓してやるからな！」

そう言つておかしそうに笑つ豪太を、千夏はおずおずと見上げてからうつむく。

「シャイなんだ、あいつ。俺と一緒にでさ」  
豪太は私にそう言い残して、笑いながら校庭を出て行った。

### 3回

「ねえ、利奈も行っていいでしょ？千夏くん、日曜日はお父さんと川原でかけっこの練習してるんだって」

利奈が突然そんなことを言い出したのは、土曜日の夕飯の時間だった。

「明日迎えに来てくれるって。利奈のおうちに、千夏くんとお父さん」

私が利奈に声を掛ける前に、圭一郎が口を開いた。

「だめだ。そんなの」

「どうして？どうしてだめなの？」

笑顔だった利奈の顔が、圭一郎の一言で曇ってゆく。圭一郎はそんな利奈の顔を、見ないようにながら言う。

「どうしてって……だめなもんはだめなんだ」

「やだあ！だって利奈、千夏くと約束しちゃったんだもん！」

泣き出しそうな利奈の声に、私が耐え切れず口をはさんだ。

「圭ちゃん、いいじゃない。どうしてそんなに嫌がるの？千夏くんは、利奈の初めてのお友達なのよ」

私の言葉に圭一郎はふてくされたように缶ビールを飲み干した。

「圭ちゃんは……昔のことにこだわりすぎてるのよ……」

そう言いながら、こだわっているのは自分ではないかと感じた。

圭一郎の隣で無邪気に笑っていたあの頃の豪太と、彼なりに必死で千夏を育てている今の豪太の姿が交互に浮かんで、何だか切ない。

「危ないからだめなんだ。川原は……パパと一緒にじゃないと」

「パパと一緒にならいいの？」

「ああ……明日パパも一緒に行くよ」

一瞬で利奈の顔が明るくなった。圭一郎は照れくさそうに席を立つ。

「ママ、明日六時に起こしてね！パパと千夏くと、かけっこの練

習するから」

「そうね。じゃあ早く寝なくちゃね」

は「いと言って利奈が嬉しそうに椅子から飛び降りる。圭一郎はそんな利奈をちらりと振り返ってから、隣の部屋に入っていった。

次の朝、千夏は約束通り、朝から利奈を迎えに来た。

「ごめんね……利奈のパパ、何度起こしても起きないの」

私の声に千夏が玄関から部屋の中を覗きこむ。そんな彼の後ろから、いつもの調子の豪太の声が聞こえてきた。

「そんなやつ置いてけがいいよ。利奈ちゃんは行きたいんだろ？」

「でもパパが……川原は危ないからパパと一緒にじゃないとだめだつて……」

朝から準備万端の利奈は泣き出しそうな顔でつぶやく。

「じゃあママが行けばいい」

豪太がそう言っで私に笑いかける。

「え？私？」

「ママ行っでくれるの！？」

「行くよなあ？利奈ちゃんのためだもんなあ？」

豪太はいたずらっぽくそう言っで、千夏と利奈に「行くぞ」と声を掛けた。

「ほら！アキも早く！」

「ちよつと待っでよ！もう、あんたっでどうしてそんなに勝手なの！」

笑いながら豪太は子供たちの手を引いて歩き出す。私は圭一郎の眠る部屋を振り返った後、そんな豪太の背中を追いかけて走り出した。

## 4回

朝もやのけむる日曜日の川原は、誰もいなくて気持ちよかった。こんなにも早くから外に出て体を動かしたのは何年ぶりだろう。

「圭一郎も来ればよかったのにな……」

軽いランニングを終えて、広い川原で飛び回っている子供たちを眺めながら、豪太が独り言のようにつぶやいた。

「圭ちゃん、すっかり朝が苦手になっちゃって……日曜日は十時過ぎまでいつも寝てるの」

「わかるよ。疲れてるんだろ？仕事で」

豪太の言葉がちよっぴり意外で、私は彼の顔を見た。

「なんだよ？俺だって本当は寝ていたいよ。仕事に家事に子育てにもういっぱいいっぱい」

豪太はそう言って笑うと、草むらの上にごろんと寝転んだ。私はもう一度子供たちに目を向けながら、そんな豪太の隣に座ってつぶやく。

「この前は……へんなこと言っちゃって……ごめんね？」

「何が？」

「ほら、何で離婚なんてしたのよ、とか……よけいなお世話だったよね」

「ああ、そんなの。全然気にしてないよ」

豪太が空を見上げておかしそうに笑う。そしてそのまま空を見つめながら、少しだけ真面目な声でこう言った。

「本当のことだから……俺たちが離婚したせいで千夏にかわいそうな思いさせてるの、本当のことだからさ」

川原に風が吹いて、利奈のかぶっていた帽子が飛んだ。千夏が追いかけて拾って、利奈の前にそっと差し出す。利奈が小さな声で「ありがとう」と言ったら、千夏は照れくさそうに目をそらした。

「後悔してるんだ……」

豪太が独り言のようにつぶやく。

「俺たちできちゃった婚でさ。お互い大人になりきれないまま千夏が生まれて……俺はいい夫でもいい父親でもなかったんだろぅな……喧嘩した勢いで彼女出て行っちゃって……」

一気にそこまで言っただけで豪太は顔をひざにうずめた。泣いてるのかな……私が顔を覗き込んだら、急に豪太は顔を上げて私を見た。

「なんであの時、突き放しちゃったんだろぅ……俺っていつもこうなんだよな……」

私の目に豪太の顔が映る。高二の春、桜の木の下で、ありったけの勇気を振り絞って「好きなの」と告白した豪太の顔が、今私の目の前に見える。

「私をふったことも後悔した？」

そんなこと一生言っつもりはなかったのに、こんな場面で言うなんて馬鹿みたいだと思ふのに……私は思わず口にしてしまった。

「圭ちゃんが私のことを好きじゃなかったら……豪太は私と付き合ってくれた？」

じつと私を見つめていた豪太の目が、さりげなく私からそれてゆく。春の生暖かい風が、私と豪太の埋められない隙間を通り抜ける。

「そんな昔のこと………忘れたよ」

豪太は立ち上がってポケットからボールを出した。

「千夏！ キャッチボールするぞぉ！」

いきなり投げたボールが千夏の横を通り抜ける。

「へたくそ！ そんなボールも捕れないのかぁ」

いつもの豪太の笑い声が、私の耳に響いてくる。千夏はボールを拾うと、悔しそうな顔をして父親に向かって全力投球した。

「よし！ いいボールだ。やればできるじゃねえか！」

千夏の顔が見る間に笑顔に変わってゆく。豪太のボールは、今度は利奈の目の前に飛んで、恐る恐る出した彼女の手のひらに、ちょこんと入った。

「利奈ちゃん、ナイスキャッチ！ さすが圭一郎の娘！」

利奈が嬉しそうに笑っている。「今度は僕に」と、千夏が手を拳げ催促する。

そんな何気ない光景を見ながら、なぜか私の目に涙が溢れていた。どうしてだか自分でもわからないけど……豪太はそんな私を知ってか知らずか、私のほづを二度と振り向くことはなかった。

その日曜日からずっと、圭一郎は機嫌が悪かった。私と利奈が、圭一郎を置いて豪太と会ったことが、きつと気に入らなかったのだろう。そしてその怒りが溢れ出たのが、金曜日の夜だった。

その晩は低気圧の影響で荒れ模様だった。吹きつける風の音にまぎれてチャイムが鳴ったのは、利奈を寝かしつけようとしている時だった。

「千夏くん!？」

私の驚いた声に、寝室から利奈と圭一郎が顔を出す。

「どうしたの?一人で来たの?お父さんは?」

「お父さんは残業で遅いつてわかつているんだけど……なんだか風の音がうるさくて……眠れなくて……」

消えそうな声でそこまで言うと、千夏は恥ずかしそうにうつむいた。彼の持つ傘から雨水がぼたぼたと落ち、着ている服もズボンもびしょ濡れだった。

「じゃあうちで寝るか?利奈もいるぞ」

ぼんやりと立ち尽くす私の後ろに圭一郎がやってきて、千夏を玄関から上がらせた。

「その前に風呂に入ったほうがいい。おじさんと入るか?」

千夏の肩を優しく抱いて話しかける圭一郎のそばで、利奈が嬉しそうに微笑んでいる。私はそんな彼らを見送りながら、玄関のドアを静かに閉めた。

豪太がこの家にやってきたのは、午前零時を回ってからだった。

「家に帰ったら置手紙があつて……千夏がここに来てるつて……」

全速力で走ってきたのか、豪太は息を切らしていて、さっきの千夏以上にびしょ濡れだった。

「うん来てるよ。利奈と寝てる。起こすのかわいそうだから泊まら



せていけば……」

「そこまで迷惑かけられないよ。すぐに連れて帰るから」

そう言いながら部屋に入った豪太の前に、圭一郎が立ちはだかった。

「こんな嵐の夜ぐらい、もっと早く帰ってこられないのか？あんな小さな子供、一人ぼっちで留守番させて」

圭一郎の言葉に豪太がうつむき加減でうなずいた。

「わかってる。俺が悪いんだ……」

「本当にわかってるのかよ？お前全然成長してないな。そんなんだから奥さんに逃げられちゃうんだよ！」

「圭ちゃん！」

止めに入った私の前を豪太は黙って通り過ぎ、眠っている千夏をおぶって玄関に出た。

「本当に……ご迷惑かけました」

圭一郎は何も答ええない。豪太もそれ以上何も言わずに、玄関のドアを静かに閉めた。

「圭ちゃん、言いつぎだよ！確かに千夏くんはかわいいそうだったけど……豪太だつて遊んでいたわけじゃないんだし……」

「アキ……お前、全然気づいてないんだな」

あきれたように振り返って圭一郎がつぶやく。

「あいつ酒臭かったじゃないか。そんなことにも気づかないのかよ？」

唇をかみ締めて圭一郎を見た。そんな私から、彼はさりげなく視線をそらす。私は黙って、近くにあった千夏の傘を手にとると、玄関のドアを思い切り開いた。

「アキ！どこ行くんだよ！？」

「傘持っていくの！おんぶしてたら傘させないもん！千夏くんが濡れちゃうもの！」

部屋を一步飛び出した途端、強風が頬をたたきつけた。こんな強い風では傘など役に立たないかもしれない。だけど私は振り返るこ

となく、豪太と千夏の後を追った。

二人に追いつくのは簡単だった。豪太は千夏をおぶったまま、雨の中をとぼとぼと歩いていった。

「送っていくよ！濡れちゃうでしょ？」

私が傘を差し掛けたら、豪太はゆっくりと振り返り私に笑いかけた。

「圭一郎が怒るだろ？」

「悪いのは圭ちゃんよ。何もあんなことまで言わなくても……」

「あいつの言ったことは正しいよ。接待の飲み会からどうしても抜けられなかったなんて、大人の言い訳だもんな。千夏のためを思えば、クビになつてでも早く帰ってやるべきだった」

私は何も言えずに、ただ黙って首を振る。

「いいんだよ。俺はダメな父親だな……」

「そんなことないよ……豪太はちゃんとやってる。千夏くんのこと、誰よりも大事に思ってるでしょ……」

傘を差し掛けたまま立ち止まってしまった。涙がこぼれそうになるのを必死にこらえる。雨はそんな私たちの上から降り続く。

「もういいから帰れよ」

そんな私に豪太が言う。

「でも……千夏くん濡れちゃう……」

「どうせ濡れてるんだ、関係ない。いいから早く圭一郎のところへ帰れ！」

そう言って豪太の手が私の傘を押しつけた。手から傘が落ち、水溜りの中に転がる。だけど豪太は振り返りもしないで、私の前から去っていった。

「豪太……」

びしょ濡れになって手を伸ばした私よりも早く、傘を拾って差しかけたのは圭一郎だった。

「アキ」

「圭ちゃん……」

「アキは……後悔してるのか？」

泣きそうで、うつむいたままの私に向かって圭一郎がつぶやく。  
聞きなれたはずの彼の声は、雨と風にかき消されてしまいそうなほど心細かった。

「俺と結婚したこと、後悔してるのか？」

顔を上げて、街灯の薄明かりの下で圭一郎を見る。九回裏二死満塁、追い詰められた時に出してしまう、不安げな彼の表情がそこにある。

「後悔なんて……してるわけじゃない」

彼のその表情が、ちよつと気の弱い娘の面影と重なった。圭一郎と結ばれて、利奈が生まれて、そして今の私がいるのだ。

「私は後悔なんて……絶対してない」

私の手が、冷たくなった圭一郎の手にそつと触れる。彼の大きな手は、雨に濡れてかすかに震えている。

「アキ……」

圭一郎は私の手を握りしめ、昔と何も変わらない、澄んだ瞳で私を見つめた。

7回

その日からずっと雨は降り続き、三日目の午後、私は利奈と一緒に千夏の家の前に立っていた。

熱が四十度もあつて、ずっと学校を休んでいると利奈から聞いたのはあわてて千夏の看病に駆けつけたのだ。しかし、家から出てきたのは驚いた顔をした豪太だった。

「千夏くんは？熱が四十度あるって聞いたけど？」

「え？いや……あいつは元気だよ」

そう言う豪太の後ろから、いかにも元気そうな千夏が顔を出す。

「嘘お……だって千夏くん、ずっと学校休んでたじゃない？」

「熱が出たのは僕じゃないよ。お父さんのほうだよ」

私は黙って豪太を見る。いつもよりほてったような顔をして、豪太が照れくさそうに笑った。

「もう大丈夫なんだよ、ほんと。明日から会社も行けるし……」

テレビゲームではしゃいでいる子供たちを背中に、私は豪太の家のキッチンに立った。

「ご飯ちゃんと食べてるの？」

「うん、まあ……千夏がコンビニで買ってきてくれたり……」

私はため息をついて振り返る。豪太は苦笑いをしてごまかしている。

「いいからあんたは寝てなさいよ。私が栄養たっぷりのおかゆを作つてあげるから」

「作れるの？お前……」

「当たり前でしょ！何年主婦やってると思ってるのよ！」

「でも俺、マネージャーのくそまずい飯食ったことあるぞ？野球部の合宿で」

「それは十年以上も昔の話でしょ！」

そこまで言って背中を向けた。なぜか一瞬、この十年間のいろいろな思い出が頭を駆け抜け、胸がいつぱいになる。

そんな思いを隠すように、冷蔵庫のありあわせの野菜を切り刻み始めたら、ぼんやりと突っ立っている豪太が独り言のようにつぶやいた。

「よかったよ……圭一郎はまずい飯を食わされてなくて」

言い返そうとしたけど言葉が詰まった。

「よかったんだよな。圭一郎はお前と結婚して」

「当たり前じゃない。私と圭ちゃんは愛し合ってるの！」

冗談まじりにそう言えたら、何だか心が軽くなった。豪太が私の背中でははつと笑って、そして言った。

「アキ、これからも圭一郎のことよろしく頼むな」

私はゆっくりと豪太に振り向く。

「あいつって、かつこつけて生きてても気が弱いところあるからさ。俺はもうあいつのバックで守ってやれないし……だからアキがついてやって欲しいんだ」

隣の部屋から子供たちの無邪気な笑い声が聞こえる。鍋から上がった白い湯気が、さっきまでの冷え切った部屋を暖めてゆく。

「もういいから寝てなさいよ。今すぐ作ってあげるから」

包丁を手にして背中を向けたら、豪太がかすれる声でこう言った。

「アキちゃん。あんたに会えてよかったよ……」

会えてよかった……そうなのかな？私も豪太に会えてよかったのかな……

豪太の足音がキッチンから消えていく。私と圭一郎の十年、そして私の知らない豪太の十年を思い浮かべながら、私は彼のためにおかゆを作った。

その日の夜、仕事から帰った圭一郎は、テーブルの上にスポーツ用品店の包みを置いた。

「たまたま安売りしてたから」

言い訳っぽく言う圭一郎の前で、利奈が包みを開ける。すると中から大人と子供のグローブが出てきた。

「うわあ、この小さいほう利奈が使っているの!？」

「ああ、雨がやんだら、パパとボール投げでもするか？」

「ええっ？パパ、野球できるの？」

利奈の言葉に圭一郎が苦笑いをした。夕飯の支度をしながら二人の様子を見ていた私が、横から口をはさむ。

「できるわよお。パパはすごく野球がうまいの。すごくかつこよかつたんだから」

「へえー!そうなんだ」

娘から尊敬のまなざしを受けた圭一郎は、照れくさそうに視線をそらし、久々のグローブの感触を味わっている。

「おもちゃ箱の中にボールあったよね!利奈取ってくる!」

嬉しそうに子供部屋へと駆けてゆく利奈の背中を見つめていたら、圭一郎が消えそうな声でポツリと言った。

「この前は悪かったって……豪太に言っておいてくれ」

私は振り向いて圭一郎を見る。圭一郎は私と目を合わさないように、ただグローブをいじっている。

「今度キャッチボールでもやろうって……言っておいてくれよ」

「自分で言えばいいじゃない?頭丸めて、共に甲子園を目指した仲間でしょ?」

「ふっ、恥ずかしい過去、思い出させるな」

利奈が部屋から飛び出してきて、嬉しそうにボールをなげる。ピンク色のゴムボールはふんわりと優しく圭一郎のグローブに納まっ

た。

「利奈うまいでしょ？利奈も野球やりたいな」

「そうだなあ……でも野球は九人いないとできないからな。野球つてみんなで助け合つてするものなんだよ」

「ふうん……パパもそうだったの？」

利奈の言葉に、圭一郎はボールを投げ返しながら答える。

「パパは……助けてもらつてばかりだったなあ……」

ボールを見つめる圭一郎は、真っ直ぐな目をしてマウンドに立っていた、あの頃のままだ。

真夏の空、蒸し暑い風、埃っぽいグラウンド……彼はあの目で私を見つめて、私のことを好きだと言ってくれた。そして私はそんな彼のことを、いつしか好きになつていったのだ。

圭一郎が照れくさそうに私を見た。自然に笑顔がこぼれる私がいる。

圭一郎に出会えて本当によかった……今、心からそう思えた。



## 最終回

「アキちゃん、圭一郎に内緒で、俺とデートしようよ」

いたずらっぽい笑顔の豪太からそう言われたのは、一学期の終わりの個人面談の後だった。

放課後の校庭は人影もまばらで、利奈と千夏はお互い買ってもらったばかりのグローブを取り出して、キャッチボールを始めた。

小さな二人のボールの投げあいは、まだまだぎこちなかったけれど、利奈の顔にも千夏の顔にも笑顔が溢れていた。

あの人見知りだった利奈が、こんな楽しんでそうにお友達と遊べるようになるなんて……ちよっぴり胸を熱くしてそんな子供たちを眺めていたら、豪太が私の隣で言った。

「覚えてる？野球部引退する時、甲子園の砂だあとか言って、校庭の砂を持ち帰ったんだよな、俺たち」

「うん、知ってる。その砂ビンに入れて、まだ大事に持ってるよ、圭ちゃん」

「バツカじゃね、ただの砂だろ？俺なんてとつくの昔に千夏の砂遊びに使われちゃったよ」

そう言って豪太は、空を見上げておかしそうに笑った。

夏の始まりの空はオレンジ色に染まり、遠くで小学生の男の子たちが声をあげて野球遊びをしている。少しの間黙ってそんな光景を見つめていた豪太が、やがてポツリと私につぶやいた。

「俺たち、引越すことになったんだ。千夏の母親の所に」

「え？」

「この前、千夏連れて彼女に会いに行った。もう一度三人でやり直せないかって……」

突然の言葉に私はそれ以上声が出なかった。

「そしたら彼女、突然泣きだしちゃって……千夏が立派に育ってたから、驚いたんだってさ。俺のこと少しは見直したらしいよ」

そんな……せつかく豪太に会えたのに……会えてよかったとやっと思えたのに……溢れそうになる涙をこらえて、私は必死で笑顔を作る。

「よかつたじゃない。今度は後悔しないように頑張りなさいよ」  
遠くで小学生の打ったボールが飛んで、私たちのそばに転がってきた。豪太は何も言わずにボールを拾う。

「でもきつと利奈が寂しがるな。せつかく千夏くんと友達になれたのに……圭ちゃんだって寂しがる。だって圭ちゃん、豪太とキャッチボールしたいって言ってたもの」

「俺と？」

豪太がやつと私を見た。私の目からは、こらえていたはずの涙がいつの間にか溢れている。豪太も一瞬とても切ない表情をして、だけどすぐに目をそらして言った。

「十年分、鍛えなおしたら相手してやるって、圭一郎に言っておけ！」

豪太の投げたボールが大きく空へ飛んでいく。グローブをあげて待っていた子供の頭を越えて、周りの子供たちが慌ててボールを追いかける。

目を赤くしてぼんやりと突っ立っていた私の顔を覗き込み、豪太はいたずらっぽく笑った。

「じゃあね、利奈ちゃん」

「うん、千夏くん、ばいばい」

小さな手を大きく振って、千夏が私たちの前から去ってゆく。豪太は一度だけ振り返って、いつものように私に笑いかけ、そして背中を向けて歩き出した。

私と利奈はいつまでもそんな二人の姿を見送っていた。小さくなって見えなくなるまで……

「また、千夏くんに会えるよね？」

ちよっぴり泣き出しそうな顔で利奈が言う。

「当たり前よ。またすぐに会えるわよ」

自分自身に言い聞かせるようにそう言って、利奈の手をつないで歩き出す。

今度の日曜日、利奈とパパが約束してたっけ。川原でキャッチボールしようって。その時私も一緒に行こう。久しぶりに私も圭一郎とキャッチボールでもしよう。

利奈と並んで歩きながら、沈む夕日に小さく祈った。私たちの未来が幸せであるように、あの二人の未来も幸せでありますように…

…

## 最終回（後書き）

最後までお付き合いいただき、どうもありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8032n/>

---

君に出会えてよかった。

2010年10月8日11時46分発行